日本語教員養成課程における実習のあり方について(2)

水田　直美
倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2001年9月28日　受理)

Ⅰ　倉敷芸術科学大学における日本語教員養成課程について

倉敷芸術科学大学では，国際教養学部教養学科を中心に，日本語教員養成に関する科目が14科目28単位開講され，毎年多数の学生がこれらの科目を履修している。日本語教育実習は，日本語教員養成に関する科目の内，9科目18単位以上を修得した4年次生を対象に，1998年度より実施されている。

水田（1999）で課題としてあげた「実習生受け入れ可能な環境の確保」と「実践的授業内容の拡充」については，1998年度以降，様々な検討と改善が重ねられてきたが，倉敷芸術科学大学留学生別科開設を受け，日本語教育実習の内容と実施方法を大幅に変更・拡充されることとなった。本稿では，2001年度からの日本語教育実習の実施内容と実習生の反応について述べ，コミュニケーションを重視し，学習を広くとらえた形での実習のあり方について考えていく。

Ⅱ　日本語教育実習

1．1998年度－2000年度

倉敷芸術科学大学では，1998年度に第1回日本語教育実習が実施されて以来，2000年度末までに延べ41名（内留学生6名）が日本語教育実習を履修した。

日本語教育実習では，はじめに事前指導的内容として，実習全体のオリエンテーション，「教師としての基本事項の確認」に関わる講義4時限，「実習を行うための基礎知識の確認」に関わる講義5時限が行われた。その上で実際の実習として，見学実習，模擬授業実習，ティーチング・アシスタントを中心とする実習が実施された。

見学実習は岡山外語学院と倉敷芸術科学大学において，ティーチング・アシスタントを中心とする実習は倉敷芸術科学大学において実施された。ティーチング・アシスタントを中心とする実習は，1998年度は留学生を対象とした補習授業である「留学生日本語特別講座」で，1999年度と2000年度は留学生を対象とする日本語授業（日本語口頭表現Ⅰ）で行われた。

2．2001年度

2001年度4月に本学留学生別科が開設されたことを受け，日本語教育実習の実施内容が変更・拡充されることになった。なお，2001年度の日本語教育実習履修者は16名（内留学生3名）であった。

2001年度の日本語教育実習の授業内容についても，全体の構成はほぼ従来と同様に行われた。はじめに事前指導的内容としては，実習全体のオリエンテーション，「教師としての基本事項の確認」に関わる講義，「実習を行うための基礎知識の確認」に関わる講義が行われた。その上で，実習として，見学実習，模擬授業実習，留学生別科での補習を中心とする実習が実施された。

Ⅲ　2001年度の日本語教育実習の授業内容と変更点

前述の通り，2001年度の日本語教育実習は，実習全体のオリエンテーション，「教師としての基本的事項の確認」，「実習を行うための基礎知識の確認」を行った上で，実際の実習が行われた。以下では，今年度より変更された実習部分を中心に，実施内容について述べていく。

1．教師としての基本事項の確認

倉敷芸術科学大学国際教養学部では，教職科目を履修することによって社会・公民の免許状の取得が可能であるが，すべての実習生が教職科目を履修しているわけではない。また，教職科目を履修している実習生にとっても，あらためて日本語教育という立場から，教員として必要な基礎的事項を確認することは，実習を行う上で重要である。実際に，これらの内容についての講義を受けたほとんどの実習生は，非常に重要かつ必要な内容であると考えていることが，提出されたレポート等によって明らかになっている。

以上の事を受け，1998年度以来，講義内容に改善を加えつつ，2001年度も倉敷芸術科学大学教職課程の教員を中心に実習の心得，教育法規，学習者理解・自己分析，教育工学・教育メディア概論についての講義が4時限行われた。実習生に対しては各講義終了後，講義に関する内容確認のレポート提出が課せられた。

2．実習を行うための基礎知識の確認

「実習を行うための基礎知識の確認」についても，当初より実習生からの評価が高く，1998年度から毎年講義内容に改善を加えつつ，継続して行なわれてきた。これらのことをふまえ2001年度も，日本語教育機関の現状と課題，授業分析，教材分析，授業計画案作成についての講義が5時限行われた。

日本語教育機関の現状と課題については，すでに「日本事情概論」「日本語教授法Ⅰ・Ⅱ」において一般的な講義がなされており，すべての実習生がそれらの単位を修得してい

るため，ここでは実際に実習を行う留学生別科についての説明を中心に，講義が行われた。

授業分析では，様々な授業分析の理論と方法，実習における授業観察の位置づけと観察のポイント，観察記録の記入方法の理解についての講義が行われた。

教材分析は「日本語教授法Ⅲ・Ⅳ」でも扱われるため，ここでは実習で使用される教科書・教材を中心に，現在日本語教育機関で多く使用されている教科書・教材を実習生が実際に手にとって内容確認しながら，説明が行われた。講義後，実習生はさらに各自で教材分析を行い，レポートを提出することが課せられた。

授業計画案作成についても「日本語教授法Ⅲ・Ⅳ」で一般的な授業計画案の説明と，計画案の作成が行われるため，ここでは以下で述べる実習に即した形での指導が行われた。

3．実　習

実際の実習としては，見学実習，模擬授業実習，留学生別科での補習を中心とする実習が実施された。

(1) 見学実習

見学実習は，2001年６月４日から６月８日の間，倉敷芸術科学大学留学生別科で実施された。留学生別科の学生は29名で，Ａ，Ｂ２クラスが設けられているが，見学実習はＢクラスで行われた。これは，補習を中心とする実習がＢクラスの学生を対象に行われることを考慮したためである。見学実習を行うにあたっては，事前にクラスで使用される『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』についての教材分析が行われ，見学実習後には観察記録が提出された。

見学実習の目的としては，日本語教育の現場での授業運営や内容，学習者の態度や雰囲気，教師の学習者に対するさまざまな配慮などを学ぶことがあげられる。2001年に行われた見学実習では，これらの目的に加え，補習を中心とする実習で，実習生が実際に指導を行う別科生の日本語力や授業態度等を知ることも重要な目的であった。

(2) 模擬授業実習

模擬授業実習は2001年６月26日から７月７日に実施された。

模擬授業実習では，初級レベルの学習者を対象に１回50分の授業を複数回実施すると仮定し，各実習生が『新文化初級日本語Ⅰ』の５課から８課のうちの１課を担当した。実習生は，それぞれが担当した課について，何回の授業を行い，各回ごとの教授内容の配分や，どのような教室活動を行うか等の全体の計画を立てた上で，１時間目と２時間目の指導計画案を作成した。実習生は模擬授業を行うにあたって，作成した指導案に基づいた副教材・教具等も準備し，50分の指導計画案の前半部分についての模擬授業を実施した。

模擬授業実施時には，授業を行う実習生以外は学習者役として，すべての模擬授業に参加した。学習者役の実習生も，事前に模擬授業で使用される教材を分析し，学習者がどのような反応を示すか等を考えた上で，学習者役を演じることが求められた。

さらに，模擬授業実施後には反省会が行われた。なお，実施された模擬授業はすべてデジタルビデオに録画し，希望する実習生は随時，録画された模擬授業をみられるようにした。

(3) 留学生別科での補習を中心とする実習

補習を中心とする実習は，2001年５月31日から７月17日までの期間，月曜日から金曜日まで毎日実施された。実施された時間は，留学生別科の授業終了後の約１時間で，留学生別科Ｂクラス16名の内，希望者に対して行われた。実習生は毎週１日，事前に決められた曜日に参加し，チーム・ティーチングや個別指導を行った。

補習を中心とする実習については，次章で実施内容について詳述する。

Ⅳ　留学生別科での補習を中心とする実習について

１．概要

補習を中心とする実習では，自習生は毎週１日，事前に決められた曜日に補習に参加し，実習を行った。各実習生とも実習期間中に，６～７日参加した。参加する実習生は各曜日３～４名で，同じ曜日に参加する実習生は，事前に補習で行う内容について打ち合わせをし，協力・分担して準備を行い，実習に臨んだ。補習に参加した別科生は，曜日や日時によってかなりばらつきがあったが，毎日１～８名が参加し，実習生の指導を受けた。

実習終了後，実習生は各自，実習日誌を記入し，実習担当教員に指導を受けた。また翌日以降に参加する実習生のために，実習生用の連絡帳に補習の内容や気付き，注意事項を１～２ページにわたり記入し，引継を行った。

実習日誌の記入項目は，補習の実施項目・内容，事前準備，事後処理，気付き・注意事項，反省事項，次回の課題・準備であった。連絡帳への記入は，実習生が交代する連日の補習を混乱なくスムースに進めると同時に，異なった曜日に実習を行う実習生との情報交換の場として活用されることを目的とした。

実習参加にあたっては，実習生に対し事前に別科担当教員より，補習の目的と参加する別科生についての説明が行われ，補習の指導内容や方法についても，実習中に随時指導がなされた。

２．実施内容

補習で行われた内容は，主に(1)別科での授業に関連した内容，(2)日常会話の２点であった。以下では，実習生が提出した実習日誌，連絡帳，担当教員への報告を参考に，実習生

が補習で行った内容について述べる。

(1) 別科での授業に関連した内容

補習時間の前半は，別科生が授業で学習した内容について，質問や要望を中心に，指導が行われた。主な内容は，留学生別科の授業で既習の文法・語彙・発音・会話等についての復習，既習の項目に関連した教室活動（ゲーム等），授業で出された宿題の一部であった。

実習生は事前に，別科で使用されている『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』と関連教材について，分析・内容を把握した上で補習の内容を考え，使用する教材，指導方法等の準備を行った。

(2) 日常会話

補習時間の後半は，日常的な会話や，別科生からの授業内容以外の質問への対応，実習生が準備した話題等についての会話時間にあてられた。実際に行われた会話の内容は，あいさつ，自己紹介，友人，地理，旅行，習慣，バイトや学校ですぐ使えることば，進路，趣味，音楽，映画，雑誌，食文化・料理，服，産業，パソコン，携帯電話等，多岐にわたった。これらの内容については，日本のことだけでなく，別科生の出身国のことや，日本との違いも話題になった。

また，これらの内容について，話題にするだけでなく，実習生が実際にCDや映画のパンフレット，雑誌，パソコン，ラジカセ等を持参したり，興味を持った別科生に浴衣の着付けをして写真に撮る等の活動が行われた。さらに，実習時以外にも，実習生と別科生が相談して，自主的に料理会や誕生会が企画された。

Ⅴ　実習に対しての反応と課題

本章では，実習日誌，実習生間の連絡帳，実習生に対しての指導等で得られた，実習生からの報告や意見と，それらから考察される今後の課題について述べる。

1．見学実習

見学実習では，日本語の授業の構成や教授法，教室活動だけでなく，教師の学習者への接し方や心配り，学習者の意欲や態度について，非常に肯定的な意見が多く見られた。また，別科での補習を行う上でも，見学実習の経験が非常に有効に生かされていた。

見学実習は6月第1週に実施されたが，別科での補習を中心とした実習を行う期間中，継続して授業見学がしたいとの要望が，ほとんどの実習生から出された。今後は留学生別科と連携して，さらに見学実習の機会を増やす必要がある。

2．模擬授業実習

模擬授業実習は準備に時間と労力を必要とする上，別科での補習と平行して行われたた

め，例年以上に，第１回目の模擬授業の準備について，非常に大変だと感じた実習生が多かったようである。しかし，実際に行われた模擬授業を昨年までの実習生の模擬授業と比較すると，別科での補習の経験が非常に有効であることがわかった。

2001年度の実習生が行った模擬授業の長所としては，学習者の視点に立った教材分析が丁寧に行われていること，模擬授業で使用された教材や教具が非常に工夫され，バラエティーに富んでいたこと，学習者役の実習生が，学習者の特徴や日本語力についてよく観察しており，それが模擬授業に生かされていたこと，準備段階から実習生同士が協力し，頻繁に意見交換しあうことによって，内容がより工夫されていったことなどがあげられる。

また，模擬授業での経験や学習が，別科の補習でも大変役に立ったので，今後は模擬授業の開始時期を早め，時間と回数も増やして欲しいとの要望が出された。

３．留学生別科での補習を中心とする実習

別科での補習の期間の前半は，はじめて日本語学習者を指導する事へ不安や，授業に関連した内容についての準備に対する不安（日本語文法や教授法についての知識を実際の指導でどのように生かしていけばよいのかわからない等）が多くの実習生からよせられた。しかし，経験を積んでいき期間の後半になると，それらに変わってむしろ，日常会話の話題や準備，進め方についてのとまどいや不安，悩みがみられた。広範囲の日本語や日本社会についての知識と，それをわかりやすく説明する能力は，限られた授業だけでは修得が難しく，また実際の社会経験の少なさについて，多くの実習生が痛感しているようであった。

これらの能力や知識を補っていくためには，早い段階から学習者との接触場面を設け，学習者のニーズを具体的に理解し，実習までにそれらのニーズに応えられるよう，実習生が問題意識を明確にして講義科目を受講できる環境を作ることが重要であろう。また，受講する科目の質と量の充実も図る必要がある。

その他の問題としては，実習者間の取り組みの差があげられる。留学生別科の補習では，各曜日ごとに参加する実習生が決まっていたため，グループ内での協力や情報交換の場は十分持たれていたが，他の曜日を担当する実習生のグループとの情報交換は，ほとんど連絡帳によってであった。その結果，期間の後半になるにしたがって，グループによって補習の準備や内容に差がみられるようになった。今後は，定期的に実習生全体で集まって，情報交換と学習の場を持つ必要がある。場合によっては，期間の途中で実習生が担当する曜日を変更するなどして，グループのメンバーを固定化せず，活性化を図る必要もあろう。

4．おわりに

1998年度の日本語教育実習開始以来，短期集中型ではなく，4ヶ月という期間をかけて実習を実施することについては，実習生にとって非常に有効であり，実習生からも時間をかけて準備や工夫，事前の練習ができる等の点で評価されてきた。それらの成果を受けて，2001年度に新たに行われた，48日間にわたる留学生別科での補習を中心とした実習では，それまでの実習以上に効果的な成果が得られた。今後は，補習だけでなく実際の授業での教壇実習も含め，さらに実習内容の充実を図っていきたい。

また，実習を核とした講義科目の内容についての検討や改善も，行っていく必要がある。

参考文献

1）岡崎敏雄・岡崎眸　1997　『日本語教育の実習－理論と実践－』アルク
2）スリーエーネットワーク（編著）　1998　『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』スリーエーネットワーク
3）高柳和子　1996　「大学，日本語学校等における教師養成のあり方」『日本語学』第15巻第2号 pp.46－55
4）田原昭之　1987　「日本語教員養成について」　『日本語教育』63号　pp.1－6
5）ネウストプニー，J.V. 1995　『新しい日本語教育のために』大修館書店
6）日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議　2000　『日本語教育のための教員養成について』文化庁
7）縫部義徳　1994　『[日本語授業学] 入門』　瀝々社
8）林さと子・八田直美　2000　「接触体験を重視した日本語教育－ネットワーク型実習へ－」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.154－159
9）藤田祐子・斉藤友則　1996　「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか－PAC　分析を用いた実習生と学習者に対する事例的研究－」『日本語教育』89号　pp.13－24
10）文化外国語専門学校日本語課程（編著）　2000　『新文化初級日本語Ⅰ』文化日本語専門学校
11）堀口淳子・石田俊子　1997　「日本語教員養成課程修了生を対象とした追跡調査」『日本語教育』92号 pp.1－12
12）水田直美　1999　「日本語教員養成課程における実習のあり方について」『倉敷芸術科学大学紀要』第4号　pp.203－211

A Case Study of Practice Teaching in a Japanese Language Teacher–Training Program (2)

Naomi MIZUTA

Faculty of Liberal Arts and Science for International Studies,
Kurashiki Unibersity of Science and the Arts
2640 Nishinoura, Tsurajima–cho, Kurashiki–shi, Okayama 712–8505, Japan

(Received September 28, 2001)

Four years have passed since the course of practice teaching of Japanese at Kurashiki Unibersity of Science and the Arts started. This course has examined and revised for four years.

This paper reports on the course of practice teaching of Japanese at Kurashiki Unibersity of Science and the Arts, being a followup to one in the Bulletin of Kurashiki University of Science and the Arts No.4.